冬乃日

淺草文庫

# 冬牡丹

信濃何丸撰釋

凡詩書礼易春秋一百五篇を称して五経と云ふ文字一百
四十三字なりこの文字の中に重複するものあり例の
六指なる一字詩書礼易春秋の五経合して五十字なり
然るに一字一字を字眼とす俗人の
二字を字眼とす能古之切ヨスルなり此
詩おのずから一句を字眼とす故に此の
句を成りたるやとなり狂歌の才士たる人
しるひめ俗人の二字を字眼にの歌を下心
まるくみきまるよりは礼字眼なり



狂句本うつし礼なれども行ふ所なり
消わひめうたたる人の教礼いるよりを
しれ爽のたくは故を意仏此歌よれるひ合
八中し学ぶ自わひたるうさ文彩あるを礼梨
よくしまの歌を吟しう一日情れ細みを感す
毎に正邪興立の一句を礼日一部の大事なる八
法説まちしるり第一注句の二字ようあうよ
しるとりみを感説なりと初一しを後まを狂句
の二字をたたしたりとあるまりてのる彩歌
屋をまり意の日一部の目尚れ二字なる五巻
めれ句ひよ秀句礼堂とハ狂句れ對を取るめ
なり一句立の中を意まる角を山菜花まるの合の
ものとまこと此なる句と照とをうけ留るる
をる知り一し甲子吟竹の本書を當國

[illegible]良井一世[illegible]の後江戸一交易
して尚世を伊勢の御師[illegible]れ毎に歌義[illegible]
世[illegible]犯[illegible]と[illegible]けてあり次に行
[illegible]と書てやぶ医[illegible]といへれ
通称[illegible]既に[illegible]三[illegible]一も雖知苦[illegible]と早下し
[illegible]行[illegible]けうる[illegible]八次[illegible]病
[illegible]うすくなり世[illegible]業の[illegible]しうさるる
を[illegible]て[illegible]を[illegible]狂し[illegible]より狂歌の奴と
[illegible]を[illegible]祖[illegible]武家
[illegible]小方の[illegible]て例の士[illegible]
[illegible]やぶ医と[illegible]既に初[illegible]の記[illegible]
任[illegible]命の[illegible]うらやむと[illegible]より[illegible]
主人[illegible]れ[illegible]犯[illegible]
[illegible]犯[illegible]遠[illegible]て[illegible]俳諧の奴[illegible]の目



のあ[illegible]れかつ[illegible]ひ紙[illegible]れ中[illegible]
[illegible]なる[illegible]より[illegible]て昔狂歌の才士行[illegible]と
[illegible]の[illegible]を[illegible]犯[illegible]
行[illegible]と我[illegible]不肖[illegible]
しまう[illegible]一書[illegible]似[illegible]て[illegible]
と[illegible]説[illegible]
歌の[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ようの[illegible]をもて知矩とせん和を
[illegible]もの[illegible]仕[illegible]
[illegible]曰さいたるとして一書を壯撰の書まてそ[illegible]
人甚用捨れ入る[illegible]大うし支考うあさむきてる
[illegible]を混して誕毒をるめる[illegible]すく形うに[illegible]
[illegible]

たそやとはし[illegible]笠れ山菜花
一書の詩やとを[illegible]とたる形り
とんとうとよむはを水[illegible]のこうを[illegible]
[illegible]旧六十[illegible]渭[illegible]をつけ
[illegible]とはうとよむ[illegible]細[illegible]不[illegible]れ行
[illegible]仕る人を詩とうけて笠[illegible]山菜花の
みつまちうを[illegible]を[illegible]
の賠[illegible]る老人を[illegible]仕[illegible]とハく



[illegible]ようを[illegible]
[illegible]なの
[illegible]ハとフ[illegible]通
[illegible]をいふ[illegible]
成美曰行[illegible]物[illegible]を和三[illegible]れ刊形日数[illegible]
て清洲の[illegible]名古屋[illegible]
所[illegible]
[illegible]
末線れ九[illegible]
紬の[illegible]
[illegible]行齋業[illegible]苦狂歌住尾張名古屋後生
江戸神田寛[illegible]年間人　二日八雲御抄巻三
霞係[illegible]
又曰枕草紙[illegible]
[illegible]

[illegible]山茱萸と人とふけて
[illegible]の為に自一死をえてさ
[illegible]死ハさ[illegible]
[illegible]自一死無
[illegible]ふ[illegible]れう一ふ
[illegible]の[illegible]実朝ニタとと
[illegible]山茱萸を詩や能せる
[illegible]山茱萸をさしてし
[illegible]服[illegible]とハ行
[illegible]人[illegible]この能をとハ
[illegible]服[illegible]年侍の形
[illegible]山茱萸のとひ
[illegible]人[illegible]加[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]此[illegible]注



すゝ[illegible]
[illegible]酒[illegible]
一書に[illegible]酒[illegible]
[illegible]六条本[illegible]役[illegible]
酒[illegible]又一説に[illegible]
[illegible]酒[illegible]天子一上酒[illegible]
説に又叶[illegible]酒[illegible]
[illegible]又曰堀川姉小路[illegible]
[illegible]酒[illegible]
又一書に[illegible]
[illegible]酒
[illegible]
[illegible]造酒
[illegible]
[illegible]非[illegible]
大化五年始[illegible]八省百官の中宮内

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典薬寮
掃部寮正親司内膳司造酒司宋女司主
水司造宮内省の所管にして八省寮
の造酒司を兼帯すべき沢の神酒のこと
まわといふ神代巻曰吾田鹿葦津姫ト定
田を号けて挺名田といふその田の稲をもて
天甜酒をかもして嘗ふ又太田命伝記に伊弉
諾伊弉冊尊所生和久産巣日神を児豊受
賀能賣神月天より降坐善酒を醸ふこと法
神代より造りまる酒を主水の為てはかる一き
いちまるを全体酒をはかるといふ
酒をはかるまあるにやいはく一説に酒やはかるを
やをうふるをいふとをいふ論するはたらあ説也



又一書に行欲と主水とを歩誠をうとをいふ
よりしうとをきをむとうるり行欲を仰ること斗
まて呼ることを水を眼前の皮をそ非人倫をうは
数行のかうるあるをまハ悔くをるに為くをるを
号を白主水を水をうれ安をまハ使をあれを
酒をはかるを謂を

うられはかをを赤を

延喜式赤馬と限をるに為き意味あり主水
に酒を造らするを都うはしと見定めて万葉
れ欲ををりに極めるものをりすいらきそ神に
しまをを亦弱のをうを田井を都とをつ白を
をを墓ををうををうを徒はるりをまを墓に
赤を れを色をの面白しをるを注すをあさり
芝山曰五畿内にかり西の俚言に酒をれむを赤を

よ業といひ仏一切の酒店へとらう饌を赤ゐ水鶏
て進ずとなりよ是一時の興よりこそのすむを云
なるべし

朝鮮のかをりすきれ匂ひの花

蒙堂曰陽氣初てうすくこのさときをみ
かひとなりよ朝鮮すきよ限らぬ業と業ふれ間
しすみきるもれるもれる兵衛の本姿と
遠考源氏よ為行の是さと形く使よ出陸まてう
日の為かひを行れ業の廣多ハ使よひるうの
毎ようられまてよ日のきらめくさるるう細を
すきるほよひ数るるまうらやられまてやら
日れうはるるをるをるをるきとひるうう
るり形迹をれ伏をを味ひるるるる又万業
の扮よ仏元妙とるを自きるはけていよ



まるひとを為きよはるるていよ朝るりと云て
赤ゐるよ自ひれうはるいと感あり
日れらわしよ米を月
蒙堂曰米を荊をいすゐ一の鄙言るりいるを西滅
の為鄙まをるをいはるて達縁るり日れらり
を日れまるみひらむとする形るり
我庵を雪よ宿うすをるるて
髮をやするを為のよ見れれと
一書よ業平れ使をの見出して悪ひて髪をを
やすとはるるるる一五五中將二条れ后いるる
をるうるまて れりるる何を縁よるりて せるうと
るら業年数はるを繋を切して業平髪をを
やるむとはるるるを張杭みむ
と吾書れるを下を為るとるを

愚考米を

荷よりの法くぶく業平紀氏の伊勢物語のこと
さきたる業をたゞやすといふるまて三百れわさ
をなつかはきうゝ伊勢のものうものむかし
心法きてをきの外なるをとこ共といふ不
よ家法ろうてをろうをこれと形ろうるる
宮くくふかきとるきの女とのいるるる業
く田ろむとてものの男なるをえていみしの
すきのれく出見さやとてあはるわこ入まう
をきたとこく一書還俗れ人といふを非るる一し
いはるものつうと気をるうまて
さくるをとはよすこしと法
新 法の暁さく火を焼て
一書曰ひろうたこのこたまてる高るての異る
うくこのひをうけて髪をきくまあるさ推き



ものまて引たるさまくる女の俗よるくる
次をの物ゆよ気をすてるとりよ一人の男
ふをうくるひろ女房るくまていまく卒
新婆れ文の消ふ前あんきるるさ方
をるこのし図西れ白るるの人りて前の母ふ
をのくる後家ろうくまハ丹裁よく
れうまてをくるをこはをのさなるれ感
するふあるを物語 当笠曰ものうしるるさ
ふの俗この眼よりていうる誠とれりんきる母
の変情をはくくる浦物ようてりを業まて
をるきや業をくて眼前卒部婆とみしま
消うをれよ消為を変のこと見けれをと
ものくるこの二分の間よなきくのるり見まて
ある れ俗のを まて ゆ ふ一るの法けと

いとなれるすがたにとりなしてさくらみさうなるまき
とこそ　遠考上巻實は西端よりまつのきてせんかふ
ゆたかなる

ひろしをえふ　ひろえ　し　虚家
田中なるふかう　柳　茅屋
雪ふるねひくく人をちむそう
遠考ふるむ柳を津函田中なる茅屋ちら
家をは芦荷の俤に見て　小方　柳を茅屋
芦を津函函江はは芦屋
淀川のすちなる大和はれうよ云むう
夫婦して住なるふよ　さいをむうさく
和義のふまを新して女房を京都へ出て
家をしをとをこをるまはよ芦うりて世の
ををたをまとをるのまのうるゆたわて略す



後のるををの場の俤すて淀川の曳舟と
むしまわ　伊勢の浮洲と説まるハ大形る
杜撰なりすして俤るを茅屋を吟味し形
後は俤まをろを入て見きをる主の本
意まるむくはみるるを今する俳諧のうへふ
まはかたるをきるのみなるむするて
とるりさうしき所ふまを居る
二のたまを茅の花はさきをく
俤をむくりまををるわ鼻ろむ
一書曰一鶏二鶏の女中尼まるりるを一の尼二
のたといふその尼の所家より居るををかて
その尼まふ盛の俤の姿をきくふきハ
俤をむくをを行ていふ消ふむをのる
はけるり　又曰とるりさうしきをいやき

あのたゞりすゞ町の中饒ひと定に一の尼とく
よりおとしてまむるゝ二の尼をおそれて
清節をたもてるならむ道心道なりきて一所に
宮仕せし一の尼これなりしくて往来ならねは
とめて訪ふる事らむ一の尼宮中に紛ひたる昔
なれりし請落わし二の尼に逍遥の花をむ
うつせるにや何の毒の紛らはいかにあとかたの
なりてより後の事なくに清ね御にあらむはやらえ
まきみのおもひてかとなく下落し待まては八重
この歌月雪の花よりも忘きて葎に埋み
蛙なきてもおもしろく宮仕のむかしを
花のにれみまてほと落溌してものいひさする
女の情なるかくなるにや此両人ともに捨て
玄女所取先生いはに及ぶ鼻二つむ八俗にいへ



を鼻すゝりして泣なるなり　見寿左鼻曰涕
左眼曰涙いふ違なるみなまり声を発して
歎く時なく涙目より出声なく香て悲泣する時は
涕鼻より出るなり則なるのむかるなみさんと治
むるなり

余おもふにすく載むれぬれぬ
いかなる恨の矢をはなつ寿
一書に晋の豫譲は主君の仇をむくはむため
よそほひしよすがをもちて厠をぬりし侍なり
又その韓信またのくゞりし使者の木かくれに
志の日落て鉄槌をおとしけむ侍なりと云て
見寿豫譲がなすは戦国策史記などに趙襄子
の衣をとりて抜剣三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏剣自殺又韓信がそのかみまで

始皇をうつとて人遠ひなる一〜秦韓をか
ろかして天下を一統す張良倉海君と漢り
て秦を百二十斤の鉄椎をもて始皇を博浪
沙にうちあやまりて副車にあたると史記説苑
等に出たり是てものるるむの此あるを刺客
鉄椎さゝふ弓箭れ沙汰を是ひとつの附
会をいそ〜故事諺に口清和の比美濃守源頼
信流るに任し〜三須守庚を伝流様に任すはに
美濃と伝流の境三坂といふ所にて難に成
その比本多れ山中に妖怪あり尤猶孫の精
て神代より住なまて神通変化きそり引〜守
庚の妻白菊を容貌玉れめ〜妖怪山神に
め〜合きて白日を変して黄昏となり路上に
旅鉢を敷ひ守庚の一族家に一宿すときに



夜中白菊をうそ〜ふ目さめて見まゆて花しるる
妻子れ中なり守庚郎等を引後し山中に
分入てりとむまとに後に探り沼に浦島う
森見の宮に三依道人といふ人あり是に尋ねて
吉凶を占に吉なり吉なりとなる処に前供人を
らひ近習家物をこうきすく烏帽子
垂衣して立出る次の家あるに美麗の婦人多
くうしなきて客殿に通るよるしに見すを女房
の白菊なり守庚思ふ人のいろ〜妖怪の
所為まてそなくきの士なり女房の敵なるれ
と日ならず練の一束三伏前きりしと引為りて
けさるに切てそ引彼士三節の矢をたちの
とにはるとめてさ行なる体なり彼妖怪命数
やそ〜ち〜ち〜一日雷に打ふさまて死て

それを此章ふまへ婦金うして法師ふ給ふすの
物といふ矢をたるりを又次社白ふ也
範ラ松を伐うれたるの場をきらるり此ふを
書篇といふを白菊社故ふ申りと云く陸佃
埤雅曰猿性靜猴性躁至所林木振雪云く
抱朴子曰猴一名胡孫云く

盜人の記念の松の吹をれる

一書ふ美濃国紙坂の物見の松なりと云く
愚考中仙道赤阪の西なり古松を枯て今
のこる享保年中ふ枯るなり北西のうしむ
なる赤勝ふ製義す非情の松ふまいりて
をそるこをそ一奇なり

志ほ〳〵宗祇の名をつけし水

一書ふみのく西郡上郡山田庄宮瀬川の魚之



出泉ふ赤壁列宗祇法師ふ古今傳授
手てふの示まりて松ラるれ和歌を詠をら
まりとなり又此泉を白雲水とまいふすし
宗祇を白雲子といふゆなりと云く

竺 脫て竺既なる小附る
一書ふ宗祇のなふ世なるをさらに云れの
節なりの礼

ちりしとなるそそ人社貴ラ物
烏絨そそひすの西社ラらるる
あそまこの謎ふまとけし附る

一書ふ貴ラ物といふをうまていやし人の
貴りそなるに烏絨の甲なり亀の甲ハト笠
ふ用ひて吉凶をきるむ烏絨の甲を胡麻の
うらなるよりまこなり及上て占ふと云く

一書に茅の根なれども骨の如くなるを以て
吟ずして見晒骨骨の如くして古戦場なり
と見てその伝なりその烏獄の甲冑なり胡国の
古となるべきやと云
傳なり一茅なれども骨のごとくなるを謎なるべしと
なして日往の庚申往なるべし
まと云
　為考此三篇は史記の龜策傳に
伝なり抑龜卜は来由とする流罪の人の
曰自古聖王將建國受命興動事業何嘗不
宝卜筮以助善唐虞以上不可記已自三代之
興各拠禎祥塗山之兆從而復啓世為燕之卜
順故殷興百穀之筮吉故周王王者決定諸疑
参以卜筮断以蓍龜不易之道也蠻夷氏亮
雖無君臣之序亦有決疑之卜或以金石或以



草木國不同俗云云又酉陽雜俎曰昔秦王東
方求鮫人織紗為帳以龍脂和之故其紗袋のごとし又南越志云此魚を烏
絨と号ふる其性烏を好むいまだ水上に浮て
烏ふきまとをとして死をうとして死を啄むを卷
て水中に沈むて死を啄ようとして死を啄むを卷
彼流罪の人をうとして遠流すべきハ何
やらうとすべきものあるべきハ人の骨を何と心
かるくむとうの骨をみまて骨をなるていの
甲をの幸我身は義を以て公論をなしたる
なるまとをなるを分海金石をもとして鳴呼
昔秦王の筭然作りてをうるを魚のまハ胡國
のうらうくをうるを魚のまハ胡國
のうらうくをうるを魚のまハ胡國
ふるあるまとをかとくきすの一茅なるを謎なるて

我も此地にて昔よりの眼茶に
見るかの如くなるまぶたに烏紙の巾を手にかけられし杜撰
なるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべしなるべし又酒肴雅趣の白
杜鵑初鳴の時先国者遇別離悲又華陽風俗
記曰杜鵑春至則鳴先国者有別離苦情
深きよりとなるのなるを知るべしなるべし

林水一升　夜

一云水芭蕉の名なるべしと
林の夜の寒きさまを詠ずる小一升を漏刻を
見るものなり　一書に林水を酒なりとあきつ
とをいふ　ミウスイとよむ　一説に酒のなる
まて金気なり西を酒なるまて敬水をひとみの酒
を書て酒の字れ義なるべしなるべしなるべしなるべし一升なり
はなるまて酒高なりとなく　愚考林水を酒



とよるべき非なり一巻れうちに酒の法法二ヶ所
及ぶべしや先注の如く漏刻は李林甫記
まるに刻漏制度黄帝創漏水制器以分晨夜本
教まるべき天智帝いまだ太子れ時をもめて漏刻を
亜るべして時刻の紅鞍をうるべし

月東北李白の詩に月を見て

一書に酒好なる詩なるべし李白しるべし
なるべしまるいの酒盧仝とおもひしるべし　一書に
李白を丈山なり石川丈山を本教詩の名人に
て和国なるべし月東北と李白と麗称なるべし
成美曰素堂家集石川丈山の詩仙堂を尋
といふ詩六言六句なり先尋日東李杜静対
中華仙顔山鳥啼古杉林野客入老梅関
詩無形何変妙泉石前翠千微間

愚考日東をシツトウとよむ一唐書曰日本は古
の倭國と去京師一万四千里に羅の東南に海を
渡中に立て東西五千月に行南北三千月に行
國に城郭なく木を聯て柵とす茅を葺て屋
英甚信女多く男多おしく冠帯なし髮を後に
垂て結ぶ倭の名を惡て呉を日本と更む國日の
出る所に近しを以て名とす　寛松曰先哲
義譚に丈山初年嘉二翟曇氏後介羅山
学程窩門一從事斯文才尤長於詩朝
鮮接式孫為二日東李杜一云く物徂徠亦曰
東方之詩杰也愚考英域又有二乘寺号凸
凸花二石公偉偶云凸感其地名同而偉字相偶
自号凸凸窠一故日東の李白の坊とい作りし



中に木槿をとさむ　毘毘　折
一書に眼れ笠に山菜花とあるに又中に木
槿をいくとしに蘇なまとる服の山茶花を蒙
をぬみて狩みるに木をあくとさまいの稀也の体
我のまにまにとなく　一書に閑元遊幸曰汝陽王
進嘗載硝帽毛曲上自摘取槿簪置帽上遊滑久
而方安曲終花不墮嘆曰花奴　一書に毘毘折を
織人のとなく　東坡の詩に汝陽真天人絹帽著
紅槿　愚考毛を擊るに歐陽公帰田録云折字
當音滴以手丁丁赤擊物声擊手音戟扣也折也
られ字義まるまきに一きとる海草盛義記に妙
考信大設大臣脚者に西国一流罪の花紫蔓れ
出毘毘一面をとりき毛て横を友弦を手にし
をとりと云く弾ずるに月又の帝一職人の中を

この末樓をうきうしていかるときをのをむを程
の心はるまて仏法を学るをうしてをかを
はるの例

うしれ行ふしをそれ ゆしてまを
一書に大和ものうに南院の今者をてきこの
まをうわしやわるひをいをのまるをうと
をうすはるを今者一をそれ和歌を詠しあるに
我のわしるをうしとや消に心学に心のまを
ふにはれいのちをとうを 勇者めしく仏て
大きにあるうをを業花和をうを学をまるを
等に見えるを仏の併るを和れあるを
関をといふふに仏あるををまるひるのの人
見をあるを大きを堂を建て弥勒をつを
居をるを見をいをめ大をを此をうしひをを



てををひをうをのをまるやまし ををに見をを
いをしをるをむをををまを 見ををを新像を書せむといを
きをを西れ京に見をるを 見れ義に迦
楽ぬ末當入涅槃法仏菩薩堪尚所結弥とを
見えるを六月れ二日に眼入ぬむとをるに
日にるるて此法堂ををのをを見をあるを
をるの示にるのを一をて見をる今を此寺れ弥
勒供養ををまをいをきを弟をを
をををまをとをて をるを云て 九月に八月
二日を迦に見る光入滅れ日をるを此所を
いるををの生仏に見るを群集れ中に仏に
巾をいをを末樓をこのむをを見をを毘沙
を弟に一人自立て悔九れ宮をるを詩て
人をて行をるを一洲して附をるのを

この九をてきこの生まてるを文に為るの人
るてを丈てをはくの石部の殺生うち
ひとりをめのてたのくもしきものうを
若を殺て肉て既部寺を奪ひ命を滅ぶ元亮
の子に示まあるに国寺はいの為に生ある生に焼を
則芝をうとをる一し

異に 終れ魚 をこい きく き

一書に為るをけに一ものを生れあ空中に生る
るに異に終の魚をこいてきて文つるきて
賣ちく市人を省こ世中れありさを対
して付をれるを云く 一書に室の八畜れ伊
るをにをうをしを上古をの魚に鬼栖て人のを
取ををををとをりをて子の代をに以十とをに
魚を葉の火に焼て門に置てよりをの以十とを



をうをて人のをとををとうをうをとう鬼失て
後をその場に終を絶をを絶をるとうを孔に下部の室
の八畜ををう煙のをのを孔代の法を毒に忘
をををより東国にて法終をを孔代とをに
一書に上総房列の演魚にをて供米をを
にを法魚を施して布施とを又を寺院堂舎の
供養のををを。ををて魚に戒名を記して布
施ををとを云くををを八生の腹腫病のをやをて
於をく失をる年兵ををの年ひをの一しを云て
図書に氏終をユノシロとをいに沃を室八畜の孫
記に云むを一人の箱みめにをき娘を於をる毒
の寺にをひをを云をれとを娘のをく辞しを
中に毒のをうめを為を年に死をうををいをを
指の中に終を入てをうをを云て

通考云ふ商人なるもの
[illegible]故いうみていふ
[illegible]
と河すなれ代をイケニ
すきたいけるの[illegible]
なるに鬼れるよ人贅の方[illegible]
我いのつまゆ[illegible]れ星[illegible]
衆注皆曰ふれ[illegible]
人の神[illegible]
きけるとえ[illegible]

一書に海童れ海士なるの
[illegible]て祈ることの星東方
処の[illegible]て寿命位あるまて後業を祐
[illegible]と云

[illegible]曰神[illegible]終をきけて



いのるふなるに[illegible]
[illegible]天[illegible]の[illegible]
を胜と[illegible]
次の白蛇の世[illegible]
[illegible]
[illegible]二百れ[illegible]云[illegible]れ[illegible]を吐[illegible]て[illegible]微
蛇の境を感し[illegible]例[illegible]
胎生し[illegible]通考[illegible]
[illegible]曰傳説[illegible]
[illegible]の星[illegible]方朝生而[illegible]星[illegible]
[illegible]

一書に漢の張敞[illegible]眉[illegible]
[illegible]
一書に姉妹同[illegible]

姉八あるべき君の由洞院さいのう
よ姉ちいさく出ようすく行の自分のきに眉
ゑるゑ出て出すに行自分の義のて行
自分ゑゑて心底よ高のさるをて
みて浮き出ぬし　愚考後一条院寛仁多
中姉妹三人同時列后位と本朝年譜よ見えり
後ひゑ花湯よ高の山水を花尽ゑ浮よ汲入て
一書に高の山水を花尽ゑ浮よ汲入て
うきゑる高花を後ひゑをもてすゑひゑるり
又一書よ上ゑ姉ゑ病人筆は腦湯
すゑるゑて花湯といゑ　愚考いゑ
ゑすゑひゑるといゑて非るり腦湯を形し
海よ及ゑ眉ゑゑを平人のすゑきゑるよ
ちゑゑゑ高の都の体と見て後ひゑ



とゑいゑ花湯ゑて釜のるき是ゑ桶ゑり桶
の上よ洞海といよるのを渡してちりなゑを
ゑすゑるり実ゑて高花を姉二を花をゑて
ゑるり姉二を花といゑすして後ひとを花とゑ
俗潜るり梦中れ俗人をゑる一しゑれ花を
すくゑて花ゑ花ゑてゑて
一書よ居湯の御所ゑ大塔の宮れ旧跡ゑ
て高ゑよなり
廊下ゑて　義のうけつゑよ
一書よ湯義ゑゑゑれ廊下義の新ゑしと
ゑゑて目出度揚ゑるりと云　白氏文集
よ繞廊紫薇架　ゑを懸つゑよのうゑるり
一愚菓短伸よゑ不彫の素ゑり新ゑゑよて義の
花房をゑゑる御ゑり　初一

れりとて此年いまさ衣を振れば
一書に杜子美の老大非傷手拂衣といふなれど
を含むの前書なりといふまた非なり　一書に前
書れぬく振衣手仗国濯足万里流と思れば後
に杖津例の國しを強ぬり名跡古迹を遍歴
して泉石をゝ訪ねてとゝ云ゝ　曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壯
　たゞ雪れたとしも袴を着て
一書に家れ漢き泉石を尋ね煙霞に分入
月に雪に推懷を述て生涯を楽むとゝ集
しに形ゝとゝ也五斗米のために足を縛ら
まて今ゝさその意を果さん官袴を脱事を
拒ぶしてきゝの雪に袴を着るよ雪に歎
息しる余意限りなしてかるに切字の事



法家ゆゑしに論じて初心の惑ひかゝる仮に
も切字なるまゝ変なるよなゝと頑なをしの事
ゆゑて切字れ入ぬるまゝを押て切字を入む必
却てるれ意を拙ふものあるまゝなりとゝ当時を
大低その心を拙れるゝ先年の宗匠一ゝ切字の
口伝をあゝまし古ふ為す新ゝ式に切字れるハ
初心を助ゆるまて宗匠憐みてまゝく伝授す
一ゝとゝく　先義ハ混沌の間より太極れ一気のう
ごきゝ生ゝまゝと陰陽れ姿の分まゝれ森羅ふ物
字を用ふ時物二ツにふるまゝ天地陰陽と
ふる事なり切字を用ふ物に對して其別の義
なり切字といふ事なるれゝ言ゝむこの為ふ切
字を用ゆ平ゝと為ゝ　かむの意ぬ中略
唯然　曰切字節こ行ふ若ゝ伸ぬれ

なるまハ切字を入れこさるなり
然し切字を入さるなり翁の歌ハ[illegible]
き素丸杖ハの句を松倉嵐蘭の追悼れるなり
亦當帰より[illegible]ハ塚のすみまを此句を出羽
の呂丸の旅中ハ死去を悼めるなれ舞ハ尚
帰を當ハ[illegible]一の意ハて古園を[illegible]
を待その身ハ[illegible]むとれ[illegible]
塚ハ[illegible]むとして句[illegible]
なるまを[illegible]ハ切字を用ひさるを呼第を三世の寄
塚なるまを[illegible]切らさるを翁の微意なり 下略
蕪村曰我ハ[illegible]を切字断字ハ
と形り　愚考嵐蘭呂丸の悼の句れなる金花
俗ハ此句をいひき又[illegible]を口ハ仕ハ[illegible]浅る
しき注者なり品ハ世上の体[illegible]を見ハ



[illegible]を[illegible]ハ[illegible]百人ハ九十九人なり
[illegible]て活ハ[illegible]を知らぬ[illegible]ハ只言勝の[illegible]ハ
なるゆくさそなる[illegible]れ大切の秘伝なるまとを
ちとなる行ちを[illegible]作切字ハ[illegible]を切る
なるを[illegible]キレ字なるを切字なるを
芭蕉の[illegible]字ハ[illegible]切字ハ[illegible]
[illegible]て[illegible]大なるまハ[illegible]
し[illegible]切大切なるハ初めて[illegible]
のなる必切字を入れしセ字なるれ[illegible]陽の
[illegible]彼ハ[illegible]を合を夫婦合体のなるれ
ハ一本立なるを[illegible]夫婦婚姻ハ[illegible]
きるのなるハ切字ハ入[illegible]
を師第を三世の[illegible]ハ[illegible]
れ微意なるハ[illegible]

なり支節に切字を入るときハ留りとして一句立
のなんとするやいかにも初心の輩のやうな妄云を
発し譏とれものにかなり同書に又曰連歌本式
傳に切字なき格字なりとありまた切字ハなき紀
ほ志かる一句ハ切字なき故る格なきまゝハ必なる
一ツ句の常言に格なきもの一ツし　格中に於る八
様し格外にまた数なき法外なる格なを略て　格
外に数ゑ一ツし　愚考此論をいかに心得てか八
いかで格といふべき切字格字丸格とを大違ひに
格字といふハ仮令ハ格日格番格子なとの数にて
定りたるをおやかにうけて切字を格字とハ謎云
なりの格中格外の義をも教ゆる傍るにもよからん
一定しのさまきのうへにあるなるなり必竟と混
すべかゝらん



霜にまさりまなり　蕣丸　食

一書に今日を勤めといふよりまさしの字感涼しと
注ある人有まさしまでとを雪にさ霰涼しく浮水
と云ふ桃林良材に又見ゆと文字まで書たりとき
一書に蕣の枕めしと表にのこまよらをなりまき
に見ゆるまゝむ朝顔の食と云て仕官丸いと有る
きよ身まて朝顔ま蕣くなりして蕣の咲をみるなかり
食喰ふと朝二し　愚考朝顔まさなりくし
て朝顔をみるまゝ食ひとかまでて有意を知るまゝ
しま成て食ると　脈とかくりまるまゝ泊り番
の士なとれ帰りなかくも神事のちらしふるをみて
さて宿へ這入て朝食の膳に向ふに小庭の朝
顔の露を帯て志のまゝしけり咲にふけるをみ
て世れありさまをも身にふくみ蕣に前書なり

かるれば余情をはらむ

世菊はて霜の残れる蝶れ物を

一書に曰はく初冬に花を咲て蕾林をもて

第三とすと云へり又一書に霜に殺されずといへ

り蕾林の作を附せり　愚考まくといふに

よて林季を附せるの事の殺れずより蕾林を附

せるのことにて是祖義れ敬一派をなるに似たりと

ますを除きより不あわ古語曰槿花發飯臺秋爽

入文門ことりより不あるを愚昧れにさまよりけて

を作りのやうに云崩すを顧ふ念れるを弱の

附別事形

麻呂の月袖に翔鼓を形すらむ

一書に仲麿を吳竜二年入唐年二十六天宝

十二年皇朝一帰らむとして明列の津に出て天



の系ありきけの和歌を詠し王維の送別の詩

なりその比れ待人餞して翔鼓るまを明るすらむ

と成し

桃花を　貞徳　れ　家

一書に月を常住不変のまれるまに八又春うつる

を附せり　一書に麿といへるより貞徳を附せり

彼長既九と号して隠去形ることを考まして落

和に五園の別荘なり梅園　桃園　芳菊園　柳園

芦の九園　此るを桃園のあるひるむ

一書に桃花をまれるとして梅とる樹とる勢

さらを桃を神仙れ蓬嶠をるものとして

三千代茅をまといへるめまを不のに貞徳の

を壽るるとわさに作るとりて此れを壽

八十余歳を持りとう

といふ筆れ韵ありし故物かたりにまかせ
菊亭荒注のごとく云並べたる所なりといへく
見ゆまじとはさふしたるにてたとへは貞一
月なき不変なるまじえとぞ嬉ものにさびしさの丈
てなき桃花といふ貞徳といへるにねよ形らへ
し又桃園として五園を定めるとすてそくる
法けの注なり磨に貞徳の見込ぬ激へられと
まならぬけやなき鶏鼓乃やわらかに嬉らか全体
物れ注をきむふ先その日の俳諧を解させ
その日よりなるきものに唇て解す事を遥
ひろきものよりてを出してうきさるすゆふさ
らふうそ竔云並へぬゆうに盛りしその日ても
その日の流り義の日様義时代をよく見込て
解すへし又その作者の器量しるよりえ



さて此桃花を鶏鼓に附するものなり円機
活法曰明皇弄鶏鼓桃杏皆發又酉陽雑俎
曰鶏鼓之音獨太簇之一韻也さまざまえ其时の
一韻と云桃杏皆發と云迚も述まじめならぬまじ
き桃花をもて季うつりを附するものなり
鶏鼓録曰撃以両杖又通典曰正如漆桶両頭
倶撃以出鶏中号鶏鼓全体両杖鼓と云
　雨ゆう浅香れ田螺かゞと置て
一書に名とへふより游魚れ沼の田みしを取ませ
て庭前の泉水にわすとふ有ける堤て呼むとなり
河原院の子共れ塩竈をうつしあひ又井出の
蛙を放ち又宇治の螢をとりよするれ數乃
ためにえ引えて田ゆりまで俳諧のえいすしみなり
奥のきさらぎを只泣り泣く

一書に曰く一のぬ月に空太と嶋とを相ひ分て人
情ふうたしみちのわくの事相のひ出て呉法ふを
くとなり　一書に曰く一を取て世をわるくを得
ず法きさらぬのさふきに法ふきに法ふるけくさを
るむりを今に縁入のやうに服をなくて寒き
夜を去のく料りを嶋一之の布のみとり絲ハ
者法公の時代とり作り始て二百年ほ呉らさる
ものるり奥儀抄に曰正月をれとあるるしを此月
さえうりて衣を更ふるるるまてきさらきと
いふとき　愚考曰ふを取て世をわるる人の余
寒に堪ふて法とを者しうめ類をり法と
雪て奠のきさらきを法人を実方朝法の小
の方るるの俳と実方朝法を徒に年奠列
に任ふやるるるるるるるるるるるるるるるるる五月あ奠めをふるる



をまえ回ひるふふ此地ふのめるさるるる
とや朝法の伝ふ法の沼の花の法みと
いふものを苅取て菅しとき菅奠系系圖ふ
日長保元年正月廿六日卒す又世法りれ
るるるふ曰実方中将の墓を陸奥ふてた
一ふるむと伝一学伝りし誠や差人法ふる
成るるて陸奥ふ法るふ成てこのるまるひし
るる此世ふてふ奠上の臺盤すへるを八雀
上りてふ打ふとそ実方中将に相ひの
ころるやとや談ふ伝るハ御るきるふれ
むとふく実方に車跡扶桑捜神記故事法ふ
ふあまとる略す彼法の花ふ法みを心底
にるるて法香の回りとやて法るふ人をまを
伝るるるまをるいふ正月に卒　去をぬ月と伝り

うを雑する人をあるむうの概花をこ月の季節
四月をこ月三月に通ずむつきといふけを季
をきさるを弥生を季の季をのをとるを故に此月と
俗をを附る此法を近年季春季夏季秋
に崩れしを附ををしるあるを物の心
得すむをを物の一をを此の大事を
庶をけてをされたいとをを男
一書に奥れぬ月を泣とをいふより陸奥産の伝城
をを出して田舎客の初ををうく家ふけ数
をて語り合をを同郷をて殊に後世をを
折折ををこと云て次のをを彼後世同士といふ
より初き時を号れ中ををををしを女れをを人を
をとはををしを或を新奥をををして賣られ
しを孫のををけとをををを恨れ



のををしをを　一書にををのをを記を田舎れ常
をして伝城賣女と成伝をを甚を悲ををを
て今後世の未を世ををを忽面を赤らめい
をを愧て雪のをををを遠に松山れ波をけて
来れ弱来をを折折伝に果を常の書をを
をを誓を云してちをを伝をいをを無を
さめをてををの疑を折を悲ををけて孫のををけと
ををををを恨のををしをを伝をを一
ををのを言号ををを牧安を夫婦ををを一
又次の注に雪に弱来を悲をを遠世をれ
田舎を伝雲を気をて無をさめををとを遠世をれ
の注新ををを雪ををを新来して女房
ををををむをちををを一は来に女房
てをのをとをををを遠世を後世ををを

今まて心をそなへ二人とも不限今の方
なり是必同姓の親類なれとも成し礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜云て賣女の
なるまはうしと治未まて去法まとなるよく
し乱して見まとも同姓の従者なりと雖
みなる陰意なり白虎通曰不娶同姓者重
人倫防淫泆恥与禽獸同也又論語曰君娶
於吳為同姓謂之吳孟子君而知礼孰不知
礼云て是法不妨ら有る恨すて堅気なるなり
口をしと癪をもちきらちうなき
明日を敵 不 首 れをわをむ
小三太 不 盃 とらをひとうをし
京往時曰結納を海て吉日まて様りて
をまの癪をを出さまて孫該の妨とハなる



よやうをちきりてを取きうそのちうをなる
しとなる次を竜塔防戦の術をはまて明日
を敵の方へ首をれをわをむ
出の癪をを恥なれと名を惜む勇将れ伊之
次を名残の酒宴の自ら一さし舞うて成一
をとらをて大将の小三太不盃
月を折うこの時 牡丹ぬすん人
衆注この酒宴のまきまを名花の牡丹を
ぬすまむと名のひ込る風雅の盗人月れう
うまと心ををうれて庭前をぬきなのをる
をしき形りて云て 是豈曰花盗人をとうめぬ
牡丹のぬしれ心の風流を双紙の地ようにな
らをしる陰なる流をうをし
おつしとれて丹地花 切町

初花の世とや嫁のいのめく
きつしを元こゝろ樂天の詩ふゝ所謂劉
院葉終朝醉元こゝろ俗語を用ふふ近
比を意れちひも粗ゝ元ゝ傳ふ祖蕃曰俗
談平話とれみえるい涉ゝきこ俗談
平話をゝめさむこのさめるゝとゝたり
しゝうこのさゝの形ゝ世ふ后地蔵ふ活
ひ辺ゝさて初花の白ふ亦て世とてや
嫁のと書ゝ李宵てその注ふ曰初花の世と
を迫き比ゝ活きゝ女ふて五日ゝ
の衣裳れ花やゝ形ゝをいめくとゝ
ふてとゝ　魚考蜆のいゝ考きこゝ云ゝ
ゝゝゝゝ云くさ形ゝヨメリれいめくゝ
地蔵切町といふふ婚礼



を附出ゝ考ふ意れ嗤ゝてその嫁入
れ行粧をいめくゝゝそかゝゝめゝ此
注者をめてゝ義用てゝ見ゝこゝゝゝ
ふゝきをいめくゝゝ籠ゝ又不畏ゝゝ
書ゝ皇ゝ以不れ附ゝ細ゝ　学笠吉此
附蕉家一夫ゝれ附ゝて初学のめゝ
ゝ不ゝ皇を新想の附とふ地蔵切とふ
を沈然ゝて新ゝゝ為ゝ中ふゝ小児
の墓ゝゝふふ建ゝのゝ世れゝ一れ
くゝふふふ新ゝ尚ゝふゝゝを学ふ祝
ありいゝめくゝ花をこのゝ嫁入ゝゝ
なゝゝのゝゝゝの中ゝゝゝて花ゝゝゝみく
ゝて云ゝ迅速を親ゝ悲ゝゝゝ
嫁ゝめゝのゝて　七十

一書曰前白ふ碁を高麗といふより老人と附ふるを義きに付て気憶を考しうるるし
ふいるるを以て高きこのちるるとて
為考七十と切るるを礼記曰太夫七十而致
事若不得謝則必賜几杖又杜詩云人生七
十古来稀と云て狩衣ふ致仕の大納言なり
それを衆注ふ考るといふより老人を附るとも
を違いの文盲の見といひ法を亟し是より以下
別ふ注る

恋をぬきぬるを除海をまり

林蟬のるるふ聲きく静さハ

一書曰面白き附るれとこるふ声きく不除海
ふ系得きねを当えぬ声しや　一書ふ髪れ赤
るるるといふより除海禄師の母と見るる



附るる一一漢土の形るるひまて書を出よりし
夫やるを待るて機を織搗衣を清らた
して待事るる除海の母を至て思を除く
述て眼を泣ける云ふ云ふ次れるハ禄師
のう一まて大悟の意を云流しるる生
物の蜂の声より虚ふある聲をきく〳〵きとく
一書曰唐梅といふより中率れ人物を附老女
といふて恋きぬ能とて甚面白し婆子焼
庵之話則老女禄邪ふ帰して除海の俗を養
ひ置てその俗の悟道をもるみむるぬふ
小女をして俗ふ恋慕の体を教少郎人ら一同
曰正當恁麼時如何僧答曰枯木倚寒岩三
冬無暖気其時婆子曰徒二十年来俗漢を養
ふるると俗を追排ひ庵を焼るるを焼るるを

附くらむ　風谷とゝ云日黄檗禅師得道
後忽思省侍父母師往到閩中一婆子出問何處
来師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不帰師恩借宿婆親爲洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運辭去於三里外説与郷
人云吾母不識山僧但母子一見足矣郷人報
知其母趕至福清渡運已發船一跌而終
愚老むりしらく焼庵の詩ありこれ養ひ置てる偈
形らん待ふ及ん〳〵戀きあまれ我子小
英をむとのきぬとなり次ふ蟬れらふ形のあ
聲をきくとしりの意味の深き況を考られ光明
藏小曰除俤を達磨の骨髄なり又曰除滅れ一
喝を烏啄堂毒のゆし人を殺して又活す亟
しなと葉をもて書へるなりはをもてして亟るを除



除俤を地ふ因て名を得ふ唐咸通八年四月十
一日逝す次の句を一書ふ曰秋蟬殺の実二句一意く
前句静さいといひれこれ夫ふを句を
ちうく仏の一き形ら故ふ決れ句ふその雫を蔭硯
ふ文ふを雲水の雅客ふと云く
ひとうを典侍れ房の内侍の
一書ふ山法ふ現をひらくとしふわ小原浄喜れ
休ふ見の一ふ一平家物語ふ文治元年五月朔日
長岡寺阿證上人御戒の師ふて女院并典侍局
阿波内侍法持ふして同年九月れ未小原ふ山
居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原御幸万
里小路中納言殿は執華ふて御製池水ふ汀の
櫂ちゝしきて浪の花さいを盛形ふ〻ま余情ハ
女院典侍の局山路小出て蟬法み草れを形を

て山を下りさせ給ふ御流
して一人の女院まいてまいりすひとりの屋の
内侍のすけと見ゆる者ふ侍るの屋の典侍屋内
侍屋命婦屋出格屋屋此屋北内二人北
屋の女院ふ高くうるはしくその侍るの
皇太一書に内裏上薦の旅形らむといふを
先注をりて云侍ふ出尾出北多いくさ
三ヶ北花鬘詩屋出北多いくさ
一書ふ数多北女房並居る侍るまいハ家ふ内裡
の給人をれりひよりの紀事曰禁裏清涼殿
南階前有鬬鶏其雄法家中雲客被出之仙
納弥市祇此事決勝負一書ふ三日ふて八るく
三ヶの津北義ふる一しとを
鬬雞のるゆり玉 摺宝典ふ曰寒食の節城



市多為鬬雞戯又玄宗皇帝民間清明鬬雞
戯を楽むとゆまきをやはり三日のるるる一し
ちこのみいさむ越北 摺活 苅
一書ふ家ふまを禁東一国しの産物を貢する
仲こ越を貢ふいすの熟語るる一し揚るハ祝
云ふて重代のさ方ちこのみいさむとを白
髮の翁を悅ひて貢を貢き奇るる一しと云
一説ふ越の摺活苅を越後の弥彦の神事ふ
て伊夜日古の神を独活をきらひふまりて
弥彦山ふをうとを生きとふ平伊夜彦山の
神皮ふ應對して此るを奉ふさらふそのを
伝一を伝ふと云 題評越を貢ふすの熟語
ふうとを逢まうけひうとをやふ 学笠曰
出羽より越後一ふ伊ゆる道のかと吹浦漬北海辺

山林の中に二つの小社あり往古を大社に
して一を白髪明神を一を独活荊明神と
称す根元白髪明神地主の神にして独活荊
をその境地をうばひて強奪すとなり俚言に
いへり上古此二神甚仲悪く白髪怒ればよく
やまをすまし神軍あり白髪の社に独活を好
毛悉失すなり白髪独活荊を白髪に献し
謝しまへば白髪よろこびいさみ急ちつまり
まひて軍和平なり俗説なりきとそ
此例を倣ひて三月三日を桑日とし中古まて
大礼行なまし毒子の老婆に横ひの将衣束を
し数百人各語を携へ独活を提列
をなし広く廣前に進み洛まるそのうを
を



白髪の社檀に倣へうと荊の神よりの献物
と称すり一とをを点ぜ忽烈風
迅雷して仇毛を失ひなるとなるに
星霜を経ぬうるうして神位衰今ををうに
あををうれ小社となり
独活を倣ふ小武の弁はをうを人を希之
とうや此前白髪軍れ
まををうの神の活をうをめ味の
ひくまをうり神軍とをを
生をしものを神をを
すを姿にうをうをに
杖をひくを 僅に十歩

愚考漢書食貨志曰以六尺為歩をれを

十日までまで猶十間ばかりはくやゆかすかに見えしまで
見ゆといふ意なり先にはいふ味わゐ有しきを
一句に光りを添たる揚書なり
猶くみかけて月とり落す 芭秋
一書に織に空かきくもりあはむかと十宵も
色は見にたゆまざりけしく降今まで見えし月
のこのふれさらんと光の色く丸きに興して月と
逢旅すと作られたるならむ　一書に僅十宵の名
まなき見えしかとも見えまじて忽月夜となりた有為将
衰の歎息なりと云て　愚考 世上の説は此通り
まで見えましとあらましとはいひ廻して 次第ゆえ双
方一字ゆゑならて尤句を解するに必その元をよく
し吟味して句情の動くところのよるをとめるなる
所要なり元来此句は仕立もえ文立れからいふまで



於まし迄といふ文字を入て見られの深めし
まてなきりなつまじ此除空をこのやうにしもやくれ
わいたかけるさまのものになれり 仮令ありてゝも十度に
一度なり夫霰は李頤といふ人劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而為寒陽氣薄不相入則散而為霰なるを
まして疑ひをなくすべし 次にひとつの證據をみよ
五元俳諧のおかるるも 風 雪 霙 炭賣 霜月なり
追加の巻は霰の句なり古書に注釈をきむと
わかれんもて勿論俳諧の集を清くよむとわ
かくまれ文を一ひらまれ揚りの名をきむかまで六句の
中になつまじう二句首て見えまじのなかなくて出
されさるものゝのよくし分別ある一し既に幽蘭
集にもあらまじかなと 題字にて書きされ白
句解 巻の日本随筆にまとめて 霰のふさく文字を

あらしめるものを云後因改れ癖薬なり又冬日
注解するものたるべきと書るを罪をおかし
雲鉄の字より注釈あるべきこと古書の字を私
に書改るるの過當なるべし

さかりゆく氷のいなづま

一書に此服を添て爵の意有天地雲鉄氷月稲
妻と云ゆく氷のひきに彼を氷のいなづま
しきをいるつかに比喩して李白れ余意をとく
けるる服なりといへり非なり　西考淮南子曰
日月天使也積陰之寒気久者爲氷氷気之精者爲
月云々と先注のめし

歯茶の紫を初狩人の矢に負て
一書に是又素移りて渉の場なるまを大



変化して云々想れ所をさらわと放下し
て狩人とて附るなり市人の初商を祝に
意にて猟師の初狩をきとるきて歯茶
れ紫胡服に赤けて一とせの門出を祝に
資重多のたとえと云

北の御門をたしあけのまを

一書に変に北の御所に初春の貢とて附る
例をて服赤れ奏るとの数なるべし北を地位
にて卑賤の者の通用すべき門なるべし
曾谷曰前白れ狩人を猟師とをえに古実を
正して武皮公事の狩を勤めに出るとを見出
してさてはを御門をたしあけまを八附
をるなり二白の間に貢する意味さらに
なり北の御門を通用の出入口なり南門を

紫震殿の前にて清規式のごとくして夜用の民此
白窕て禁裏御所と目を付するなり
馬糞　このくたのごきよ風の折のすみ
一書に門前の二ツ糞を掃除の姿なり地紙形
に竹木をなのみてうきにするに表風にこのす
むさるなりと云
茶湯去をしむ辺の蒲公英
一書に掃除すると云より奇麗すきを
見出して茶湯者と侍ることを述べこの歌
不浄にそみてをとをしむ情こ　愚考豈為
むかしまのきらに表れきうなき中に
蒲公英と宣めるを所ふおしくその陽をうこと
殊に蒲公英と書訳を此字蒲公英（ホコウエイ）といふ人の
うを忘そめて変をしそなるまハその人の名をもて侍ること



らうをけにものよむ姫うしたきて
燈篭　をけにしるをけをなをけ
はけ萩の角方ちをを撰をまた
一書に茶湯所にうしたく姫のよむとあまこと
利休の姫の侍をまあるむらうふけに三義
あり労気ちまそいをを良強をまを男
まをう又鶏丈を八方又鶏をゆとしるより気八
鶏丈をむこの　愚考鶏丈を年れふけ多歌
るをりものよむ姫を労気をり　一書に前の
の茶人儒者の姫をを誘ひて和辺を遣遥
すの侍を侍をらをふけをうはをくよ八し
と雅綺をに堪なとしるをりらうを労多
その心を労をる義をれを家をものよみに浄く
をつみしなをる一し浄式をらうふけに成をに

しとなのたまはせとるなりとのたまふ
はくをつたへの字なりとうし
源氏は四石の入たのこの一はきまへとなりてハ是
するなこと是よりこと是する義を一理なりと非をぬむ
ふよ作よ一一附の意をものよみ侍へ形の字勞
まつ姫を好くさめて世辺のうきえをくと
誘連て侍みををを生ふ愚考
此注者自ををもをしく言ひて侍よ命長へ
引入られ癖ありて文花をのさるうるををれ
此らうをけを苦くさふるり労気なりをの
よむ姫をさうひ侍まて世辺の遣逆とをのる
をを物よむ姫ものく姫ものぬふ姫世辺生るる
よをの面ををとこよをとうしくを下のなる又傳の
字義をあるを作（カミツク）附の字こ傳ハかより上を



この侍くこ作附をを上よりかをこう侍をるを
るりもれよむ姫をいをさ十二の十二三形るへしをまう
侍をこのハ〳〵新の義をさをるものよみ形るさ
まるりを辺こ生る姫のもれをよむやら書やら
夫この意まるものを侍て侍よ侍くとい義を合点
このまるる一一　一書ををををををれ男よむををく女の
いをまをををこををむとをおりの定めるる一上代
まを孫末の歎まて思よ女れつ〳〵煙竈を捨しと
をりる孫林良林よ見ゆの文和のこを侍らてるるの伊
をなるむこの　一書よらうをけしいよるものむるよ
さをを煙竈の捨称よるるらてみをこの男れをと
一人をれをれをる侍をて煙竈をるるを男の
うをまりををこのをるよ煙竈を生ををとを
をの注者いををもし先注を云やるるむと

さまよしよいたいとすまうとうとてそま　一書に
はるとしいとよう露と萩の上に見えていつ
まさこのよいきこものそのまと雲の隠きゆに
萩のいたきぬるや萩のうぬをやこの形のこのゆへ
に花ゆをいわさぬるやや後拾遺に萩うをふく
まとすまをみ姫こし浅ひ迎に起
うめむ又一書に時くらふるこいとう
そのうめきに思ひのかとを撰もまたとす
まひの勝負ふよせて曲芸をさされう雲
萩のうとけるきさまかを見一堂言を後
義の時乱すてはゆと萩とのあよしとし
うは隠をのすうに踊子の姿をゆりされやう
もめるるやうるう見雲を形まれをおるて
愚考実まてて鶉文をおるひうれとと見



ふるこ大和物語に曰昔津の国に釈子ありしむ女の
見芝に恋慕の男二人ありの男とも此釈子のうち
きろさーけあつきこ幸又物をれこを釈子と
に入るまてさらにまはとうれとう形ゆふい
ゆきをそまと宣うねて手月をれうされた釈
見を見うねて生田川の面に浮て行る水鳥を射させて
あてこむ男に手の子一しと形うるに一人
を所を射ひとうを屋に女をむこをく
一をの袖を泳して川に入ゆをりて見す二人は男
ゆいて川に飛入一人を見をとう一人をを
とうて三ノ人とまに入むを一くるりぬ出心を京
所の別當泳袖して云勝まけまるくてやも
るむ君にはりあひこふの山を紙とまこの
伊に者ぬ一しこの姫ゆ釈のさまと

雅楽寮にて二人の男の伏をして勝負れ
歌を角力にて二人の舞を應ずる伏をめいず
連歌の式目に曰物語に歌故事古歌歌を
取て二句付伏に伏ひろまりたと云前の二句
を伏し次の一句を二句の内に三句よりて
付伏なるよりおいてを分しとるべきを一
章三句の難なるむとおりに族を伏るしまを
古法にて今をその法にいむとして
上後嵯峨院の御時前句れ七文字に伏のとから
してあやまりをへしきと伏に帝かとなくを
の日の付を付まを定とおそをの難句にて
伏に徒歩る付同様に遠乱に及に帝曰の句
遠くの人のより勅宣あり民部卿入道の
云そをまを拾民をる人きれよりやをの氏に



伏の系をるやはをきとやをれをを融覚の云
上を附はしとなるを侍をきを伏はしを
ををはや載む二村の山に伏をを付れを
感頻をを備前感類す覚を本歌宜渡三句
をと云本歌を後撰集に清原深養れを
をなやに云にをなりをの二村山をを伏をり
をを故に八雲御抄に曰一首れ歌をを三句に別
て付を例のなをを句の語三句を分論のをを
とををを付れを付に付をを
を雅楽寮をを付に角力をを撰をを伏として
を前句の連歌をして付ををを前二句をを
若原血脈の伏をを宗をを故に伏を山の
歌を付をを伏をを伏に伏をの
とを見をを伏の句を又をの伏を山の連句を

けるさとしてこのうきをハ附しなう志のうきを
江列甲賀郡にらゝ山れたくきこ　　[illegible]
地蓮ゝくつゐる郡ゝ翁の感しまい行のこをり
ようゝくをゝ[illegible]ゝやと向ゝ杜國云おとき
かうこれ弦よりれりひよもしとこ翁ゝ機姫
よくいしゝ心かけうとゝ襲羽ゝしとゝ此附を
津國ちゝ名ゝ[illegible]ゝ蛾をゝてゝの男をゝひて旅
死ゝ及ひゝ古ゝをとゝ[illegible]ゝ資をれともきゝ
この平氏の武士名ゝ[illegible]の姫の幽霊姉妹地蓮
を撰ゝ並ひ法の資を始ゝ古弁古歌のゝてゝも
むすひ合をて一ゝれゝゝゝめゝゝ[illegible]ゝ
をゝゝきゝ資ゝ翁のかめゝひしゝゝゝ心ゝの遠
はゆ蔵のゝゝゝれゝ歌ゝてゝれゝをゝ資の
帰の日十二のゝのゝゝひの角力より取出し



きゝゝをゝゝ名れ古ゝゝふ合体して附ゝゝゝ
をゝゝきハ附きゝゝふ古ゝひゝゝはゝふ名きゝ名
れ表ゝふゝゝゝ古ゝゝ二ゝ利休ゝ姫ゝゝふ
ゝの古ゝゝゝゝゝの三ゝれゝうちふゝくゝ心を
ゝゝゝゝゝはゝゝき資ゝゝ元ゝゝゝゝゝゝとゝ
翁

蕎麦さく　青し　滋賀　樂の坊
　　名月夜双六寺れ　猿蓑して
魚考紫魚樂の坊聖武帝行基ゝ勧進を
して大佛をはゝゝしめゝゝ東大寺の大佛
をゝ所をを移しゝゝゝれ故ゝ坊とゝゝ又名月
夜としゝゝゝて和歌云藝物ゝ名月夜ゝ對
すゝゝ名のゝきゝ人をゝいゝゝ文ゝゝきゝ
とゝ云く　愚考ゝ俊の説いゝゝ　万葉青一従

後京京迁干宗平宗宮時改略して云法保川より
いゆきいそうして我身くるる衣の上ゆ脇夜
云々何そ我が身より無恩なるむや
去るのみなる此業として離を法ゆ
命婦の君より来るむとする
一書より離を法ゆ世を思ふ人を是必やこ
とるのきれくく形ゆ一しとして命婦の君より
つ是業をして見法きば我と得ると云々　一書より
ゆの二名をやことるき人の恋ゆて面白しるて
いふゆるを見来るき事をゆて思ふとして
恋君といて恋と心得るをなさまし
中のきまして法波の水より遠ゆき
一書より来のむゆ法波のなかの見業
るくく法しくるるゆ　一書より



のはすくひ来と独言をしゆ
といひ命婦より来るて我すといひ只ゆ
るるより法るゆを法て大伴皇子の使とゆ
十す鏡より曰大伴皇子事あるて難波の津より
思ひ出て云ゆ中略その法言波といふの吹入てのの
浦ゆくくしく荒ゆれ供れ人しまよかとゆ来
るく成のひしく云々新ゆ云言湖を津波るる又
洪波形十す鏡より伊法ゆて略す命婦を宮女
れ内五位以上を帯を門命婦といふと云々

佛陰ゆ　魚　解き云

一書より讃岐国何の浦より殿の大
魚あるるゆ思心傷教の法の佛像
を服中ゆ光出しるるのあるこ
一書より讃州志度の浦長田の仮平恵空上人

愚考般若を法ゆ

のすゝめにて一心念佛札行者となり或時
志度の浦津波にて流れ失せける鰐の
腹より惠心札の弥陀佛を得たると云
なりけりとくとそきこゆるなり
縣ふる花見次郎と作られて
一書に花見次郎といふは日向國の何次郎
といへる歌詠なる者のありしが近國に遊
渉せるかとの花見んと催ふして名をしら
まざりけりその後名をいひて花見次郎と
と仇名をつけたりとぞ田舎には古いとい
事なり　一書に次の畠六なる彼の長者
の地方多く持ちたるにて別によ子細なし
景清や矢刻の櫓のむかさべ
庄屋札をよみて送りぬ



一書に平句の二の札落書句にて又短句まで
も一定に一句なり長句札まで五枚句の外
ことさら差別あることきこゆ　一書に景清札櫓
八技棄第一の長櫓にして長さ二百八間矢頃
の里にて日本武尊東征の時矢を放ちて落ちる
よりして此の名に呼来れしなり　愚考平
句に長句短句に分かれ武落一千首ありしに
とも秘心の迷ひなり景清やきそ名所のやこ
しへよもしと落ちる之又日数句長きまでに
も心別なるゆへにむすかしけれどかくるゝと同意
のかなきて決してなるらると志るへし近江の俳書
にある句と揚るに此落を出せり芭蕉の弟子なる
なりとて謹も前上をもよしとされへとも万に
一つ多本にするの旗によあらん笑止なるこの

少しよりそめふ華を費しぬ同じ面の
見渡しをさく法とし字を改るふ場て
況や両頭ふ松いてたやや家ふ

詩商人年を会ふ酒価弐　其角
冬湖日蓍て駕る鯉翁

さの多るとし服を自ひと揚句ふ
詩商人花を貪ふ酒価この郭　其角
春湖日蓍て駕興吟翁

ちるまを首尾連環の韻として別の気向を
すてめるる少ふ因意の格式るり形五巻目れ
揚句れ柔トふ変しし　一書ふ矢刹の里
在屋の庭蓍ふ大きるる松有て世ふ矢るし往
来の旅人求めて見物しるこの事只年中の
焼失ふるくるりしとるまれそのはふ対して



詩歌連俳の風雅をもいひおるとるる一
特しるを柴荊長ふのひつるむ
晩日をさるる　力爽　年

一書ふ老松の毒ふよせて歌ふみるを不
圖古ふのるをれりひ出るさ方るり若の
ふしれうる余美るる捨るしるふ今を
宮て成出して柴荊かとの業ものあるむとと
いまこのるをるふるるふるまとしふ
歌の意より世ひ出るるむ又小町ものるふ
我をこを郭ふ何りと塩この方のまのきれう
らの松を意きれ此歌を添て小町を捨るると
あり去のまを松の一字ふの解ふ使句りる次
のるを浪人の貴ふ海るるて室代の力を賣
て年の用意をもむとるり

雪礼狂吳の國の一公主めつらしき
一書に一物して名利を棄て世を
風流の道人と遊ぶ心より古人の詩をとれ
りひ出ぬるを恵宗礼詩に金重吳天雪香輕
楚地花　一書に東坡の伴りてゆきの
あしらの賓客と物しつり吳國の詩狂人雪の
無に寄て訪ふて秘蓋の刀を酒に代て餐
應す信友の交わる侍に黄金不多交不深
とをいひきたるこの朋友に信なき人の落情を
誡めつる一吳國の公主麗公主朝鮮公主
東坡公の數なる一し　　魚考先注の刀を賣
ふ人の侍をれりひ出ぬるとを非ず向ひ附て
風狂人礼来まるこ後の注の賓客に又非ず
朋友に信なきたるて秘蓋の刀を酒に代ふる



お遠ざる一し彼刀を賣て手用意する形りそのの
東坡公るむ尋ねて風狂人の来るをめつらしく
よろこひてるすとふ者りこの云友を求より来
ふ又ふのしうしやの語ふる蔚人合して一孫風流
よ見ゆるり此刀賣手礼手といふ字をいふく
えてうふ妄言をハりそ
襟に言る尾この　斤袖をとく
あらこ人と指を指に呑かさむ
一書に彼雪見礼風狂人に言る尾この斤袖を
切て襟巻に仕ふ侍に無ある大しむと
全盛との仇ふら一ふり決の名を則揚屋の
侍にて宮に劉伯倫の詩の意をとを重
ふり劉伯倫性嗜酒　嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死便埋我

芋子は一童に成長して禅
無味堂曰色情を懲さんとして禅法を学し
一休禅師のいまし成道するに付絶書を
よそへ芋子の一童に添て本来の面目を
立すべし一月名ゑ[illegible]とあるべきの体
なるべし

三日月の東そそ[illegible]の声
秋湖のすゝみ琴の一すじ

一書に一童の芋子に禅の深きを黄昏時分
三日月に蓮の宗をのべるを次の日西
山に三日月をのめ東に晩蓮を守て
湖上の泛舟を惜みて琴弾すべし
ろむ　一書に芋子の一童に入相を法行を
常の心をむ次の夕三井寺と



秋夜湖水に月のそみ清風徐来水波不
興飄々乎め遺世独立となるに赤壁の船
をもかりて出られまして
やるべしむとたきり月星て忽僕をして
その琴をとらしめそれをひくとすべき所
なるまとも千眼一統の場をおはるまて一
端なる興に楽して借られとも借りて来る
時そそや興尽れて
例のものぬこ向上のそ[illegible]
のれりひとさるに[illegible]て尋ねの人
やう甚お遠きり三月も蓮の声も西にして東
の方をそらしとしてそ[illegible]
と宝て湖上の琴を[illegible]
月日琴在南方鐘在西方琴りすとそ[illegible]

もし聞し召て弾じ給へといへるなり返却の意
なりといへどもその撥ハ源氏松風の巻にみえたれ
のひゞきてこのきたるくしかに又大鏡にこのたぐひ
ハ引かへしその影今のさへちしかにと云獲衣に
日琵琶をとりよせて姫君にかゝてすなる二返り
たゝりて弾まふにいてしはんなの手に声などをかしうはげ
唱歌なるふさへやされてこのきこえてしし聞しいなりて
まゐりて時うたる又論語曰子与人歌而善必使
返之而後和之
意家なりをゆるしてそせたを放そり
声よきを念佛藝を無くしつゝ
一書に蔡邕琴をかしくて借られとも弾きて之す
とりかへさしずに帰てそのたせを弾きてそへつか
されども弾得て見れば喰に心をなくて



よし無益なる助け得させすてしと殺生の台に作
置て無心不益の見識をも見きらるするし次ハ
前なるたもを放つとりよりる発心のきころちをそ見
まうり下略
爲秀白虎通に曰琴禁也禁
止於邪以正人心也又風俗通に曰琴之爲言禁
也雅之爲言正也言君子守正以自禁也夫以
正雅之聲動感正實故善心勝邪惡禁又樂
書に曰琴動天地感鬼神その聞しそら
無きといく哀もし引かつすをさのうく服よう
守護なるに終日弾かれて今やうつらむと
するに湖上の曲声に花ところき番れ魚をの
こらく淵中へ歩隠れするなり益まで琴れ
徳をうずまししかに忠なりし次の台をも又ゐに
由へにそのたせを放かさるそといふに數箇の

長仏を去りてをめて後世をえ教をたとる
教生をしるる甚はやまりことを苦心よひろうまて
放ちゆるとと又長仏の德をなくはちしるる琴
と長仏とまて中の人を弱れ心を改悔をしむ
尤琴をを聴く長仏をまきをの中より前日を
て後日一奪へくるるめこをらるを者れ日三四の要要
おこのまま　花　魂　をを松のうけよ入
その童の白を我を知るしく
一書ふ西行上人ねのをくをを花れをとをてをる
死をむをのきさをを花れを月のをを二をるをを
きの歌れ意をて祖翁をその日をねるこの
みむきをり　為考場白をその歌をねる
まふをるしきをまを花の白この全体西行れ歌を
この中ふをこを翁の引色みて作をふ妙要



山家集ふあくうを心をさををを世をはちくら
ちうをむれちを対ふうを一き世歌をよく味
ををふ一名人れを陳をその是れ日と呼所
をををを見る人の目うくらるるしを見中感歎
するふあをりあり但一首をを二首と見をる例
諸のををうををるを所をを思はいはをるをを

ををふ波津ふ所火焼家をすけれと
一書ふ万葉集人丸れ歌雑波人世火焼亂をす
けくれと己の妻ををとをめはをくき
炭賣のれのこの妻をを是をくめ
一書ふ汝のすきをいをを中き炭賣れき
妻をいををををくををををとをめをら
ををむと歌ひをををををを書をの先

とあり此てにをはを思ふべしめやハくみわらひぬと
うへして治定なる句法なり古今集よみ人しらず夜の
やみはあやなし梅花いろこそみえね香やはかくる
るゝこの歌もこのやハをかれはさきなと見ゆり
て治定なるなり「やハ」のハを不用にしてよめるなり
中略 炭賣れ書を悪しとせは句の味は濁流な
るく者のなりなりと云く　愚考此注者こそ然なりく
に意地悪く自己の了簡に目をくらみて法傳の
弁をかさりて初心をまよはすの罪甚し其故そのて
にをはといふはエケセテ子へメレのかなを云ふなり
其のもじをいひそめ此てにをはて心の文字ハいふこ
となり又いはひそえねばならぬのてにをはに
て是やハの字を別派の意なりとは申さるのでに
た名誉人のなす所なきハくるとをいへ八梅花の



意ある人丸をあしく覚て歌をさしのぞきて
此歌なり此句ある炭賣のいはれこの歌へ來なり
しを此句よりいひかけるかなるまじく候やその
法方の義きゝてはきゝしこの事なり
人の粧ひを　鏡とく　寒く
一書に表に鏡を負はきて薪を今釈し実を
炭賣に鏡磨の對にして炭うりのよごれ汚る
に鏡ときく此清きを備ふるなりと云く
花蘇　馬骨　の　裏　小咲　あり
一書に初の五文字花蘇と有此表のまゝのを
まはしよに落て其花を折りて花と思ふてある骨
の裏と曲がれを折りける百合の中に置とも
平句によりよつかれ花をも文字の下に二と
いふ一し 下略　愚考いはく弁をとうすふゝる文字

為まるを作るに又同じく書くに芋茎を四まるひとつの世
て里書し　宗因志ふ山れ松を埋みてゆきく
作り　專順　さの里の芋植樹ゆるふ　為
るふ孔第三為るまあるに平るまあるに
誠まる第三のまるりこのくれぬく作るけを第
三まる為りの論をしと云て　一書まる花蘇を五文字
組名の第三るりてまえ入らを五文字を意こ
又皆左孔まるくの作るし来孔意このくはし
まりてまえれ入らるをよう初めよりいふく
七字孔位あるを心はてる位すしと云く
為考後の論一向まるをひを第三まるるる
為十なりの三孔作りの方宵第三の意味と
いふをかるまなるに第三まあるに太山板形
といふを法まて作る所まを敷て為の論を入らを



るるるり仮名十三条の法まて自作るるれハ
とて第三まを形らを自るを是をいるし
第後をを却て当とるるるく対まを為の説く
るるゆく猶為るむと蒙とを蒙むとを師しまを
何てあきるるるるく可為むを所ゆて為を
て第三の本意とすると以ゆて為を
安く得らる一し近さるて為を得ん余をいと
為孔書をを心身つきき事なり
鶴　まる　窓　孔　月のすのこ
一書まを花蘇を窓先の生垣とを見形
る書の書とい合ふ花侍を仙境と
もむりひよをて静まるるを作るを
逸人林和清の使をかのものを形一
とを云く　為考いるく静かなるを林和清

の俳やいあり芭蕉より処ありて翁を
附するより焦氏葉に曰鶴愛陰悪陽
易に曰鳴鶴陰に在り霜故に雨霜
とまた書に附する雀を雀を花
の咲花の糸物なり十二ヶ月花をれひとつより
風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日
一書に秋の日のさびしきに風もふく瓶
の酒さへなくて寂莫の言葉なりと云て
風雨に吹るゝなとを大に非なり秋の日はさび
しきに酒なきは瓶の酒さへなきに剰秋風の吹
きまさるに吹まとはるゝ必ふのぬるを物に
年のゆくを悲しむ又一書に五柳先生の俳
なりとするは非なり
萩織る笠を市にうりする



一書に萩の花笠とするは非なり萩と萩
との写し違ひの一書に酒なきとしるすより
萩を織て造る笠を市に出して賣らするし
なるすなを振賣と同義なり
加茂川や胡麻を代参微返し
一書に土加茂の川上に稲荷の祠有此神の
好物せりとしてその社に悉く胡麻を捧
に一本を捧るを胡麻
を代参と云るはしなを社をいとて
一書に茅の輪を九月に稲荷の社に
参詣するを加茂の参社にて九月上の
午の日に此事有
いとくらの年彫ら
一書に岩倉を鞠と云るは誤なり岩倉

倉ハ洛外なりといへども景の慶よして冬
のかの必御よも出しこより附なり　愚考岩
倉ハ四方よ山のかこみよ付たる山則小岩くら
なり桓武帝王城鎮護のためよとて三宝を
埋めたまひし地なり
是のみよ可布橋歌よ笑をまじて
うきたるこころを然ふに上乎
一書よ笑えまじてといふより悪女を隠すの三乎　くルゐ木
よ三平二満とて乙御前のるい　成美曰山谷か
詩よ三平二満過則休　愚考二十と限りくる
又礼記曰十五而笄二十而嫁故あまりて二十三
花よ泣桜の歎き　捨よけふ
一書よ桜のちり残るをさかりといふて過去の
花を観想しての附なるへし　或智識の曰仏



なる法なる戀を思ふとよかれと示しかふより花
みちあきよりかとおもひ捨るさたなり
一書よ桜の徽さ衣の○ひる衣の敗まさし
観ち有しと云て　愚考前句秋よ落て花を求め
あやまる観想心裏の妙華よして以心伝心大切乃
場と前とあり訳ちなく探り得るよ花よアワ
と味よ拍子よ彼納豆をとくにまよ花と
なき全心よさた爲て見えまして皆是華世の
桜よ戀する妄想なりと捨るる麹んで花よ
泣と虚よ従りまはし次の俳老その胎臓
をひらくのむと歎きのうたまはす水を進めな
るちもし是て識りよ薬水有心のうら感歎する
よ絶たり花の○ひと讀てまて一句見情をさぐ
滴前後のうたはり見えたり必

懲の字は書換えなどせまり
侍りのいとなん歎文冬をのむ
一書に花の紙表はうつ西言禅師ちをを見出
しまきもの忠侍正遍昭いまと良峯の宗貞と
やまと時毎色をうひをうるうちまえ帝后の姿に
て歎冬色の山衣をてをまして伝麓の中に波
しまず宗貞けきうし為るに敬てれ芸をうう
をを宗貞山吹の花いろ衣ぬしやまきとく
とまえ伝ちの野しまてをまきうの山吹をい
ちないろし詠をまう虚栗に山吹や西言禅師の
拾衣をかちの孫礫色をくちちまして塗る
ものと此をを山吹をいて葉をのむをうとを
一書に吞と侍るるを山吹れ高の或をかを
をうう一葉能をを吞とをまを経るれ



とを変をを侍るを見来所吞といに侍をて
食歎の能あり乎越納を見をくとを侍をを
無為年をを見るをいるを流をり年の能を
歎しをを山を一をうこをきて年をををを
このをうれ執を能を言の外侍れ水を
のをを山とをるに山吹の新うを侍ちををの侍
の山とをるをり高青丘を詰に恫性歎冬花
樹ト一指今日誰共開是を枇杷をり又新後
拾遺集に山吹れ花越波をちを外ふう
侍をひをくの井出の玉川をれ歎をを
花の新のうを侍をを水を吞に必宣をり家を
のうを侍をを一入をの一退耕録に白元松之
時鼓岡湯薬待学士者飲麒麟草此を東
坡の門を之飲等共例かを

白燕まことに水を洗ひ
宣旨にて　釵を鑄る
一書に白燕を源山の清泉の地に拙まれ
て山吹の花ひらり水の清らの形をを生
しるしを本草云人見白燕主生貴女故燕名
天女次を洞冥記曰漢元帝之間招灵閣有神
女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳
中猶見此釵宮人謀欲符之明日視釵匣唯見
白燕外天　一書に燕の一名を天女ともいひ又白
燕を見まく貴女を生するといふ故事なりなるべ
るその貴女よりして釵を鑄まくなる宣旨の
下まりと侍らひ一しきて此宣旨こうして中
てかの天皇のものを鑄ることくく
みものをまくなる釵と虚空より例のまれな



るを稀なりとぞ
天皇六年清和天皇八年天智
燕雀の類なりまくなる事なりまくてその光女と
いふを倭姫なり和漢合日光女の部なり云
伊勢齋宮神道之大祖也日本神道以天女

とぞいふ
最考れなるまくなる釵とそなの
事をやなる釵をなるの魂なるまくて此光女を生し
まくれそなの光女なるまくなる釵なり
成美曰西京雜記曰元后在家嘗有白燕銜白
石大如指墜后績筐中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合之遂還合乃室釵又遊仙
窟に白燕来白玉釵　一書に白燕を日本に
なるまくなるまくて玄宗皇帝揚貴妃の釵を鑄
さまくなるとなりとぞ　最考非なり花白きの
を稀なりとぞいふ既に景行天皇八年天智
天皇六年清和天皇八年白燕を献るまくれは
燕雀の類なるまくなる事なりまくてその光女と
いふを倭姫なり和漢合日光女の部なり云
伊勢齋宮神道之大祖也日本神道以天女

為根本則天女とゝ倭姫命とゝ日本神代の祖りて御歳五百余歳まして石隠りの
今此隠ヲ国是なり本朝云双の貴女と謂つ
へし抑委しくゝ倭姫世記等を引してう
さうひをゝらすしさて秋ありて既隠りの
ゝ野の宮に三年此秋ありて既隠りの
日に到りて天子自此榊を秋宮の此に新に榊
加へ給ふ此を別まの御うとて榊を串に髪
美多り伊勢の榊田川ゝ倭姫の此榊を植し
給ふ所なりよて榊田の神社なり
八十巻を三つゝ重ゝ壹毋ちゝ
一巻に鈔を鑄るとて神符に即位の此賀
と見入法国より毒の人をゝ熱白又ゝ
老業ゝの侍なり又ゝのゝ巻ゝ人ゝ余情



ゝ見ゝ侍りと云ふ　一巻に八十を三つゝ重ゝるとい
ふ二百四十巻その巻ゝ毋なりと見てゝ忘むつ
又上の八の字ゝ執筆のなやまりとゝ非こ
又八十氏川八宝葬ゝの数まて只数の多きこと
いふなり又七十二才まて八十を二つゝ重ゝ八十を
三つゝ重ゝとゝいふ説なり此ゝ此ゝ
巻ゝ曰多喜安元法眼のゝの語に白燕を探ゝに
すまとゝ多り肥然城中に白燕なり城に出ゝ
多り予此ゝ此ゝ此ゝ白燕を見ゝ事
三度法然上人の説とゝ雑事を集ゝ書此中
に曰大和国竹林の巌上に居して勅して神武帝
の玉鈔を鑄ゝ法国に勅して百巻以上の
男子此鈔を存ゝ多ゝを石集て此に役をし
此玉冠を鑄ゝの例なり竹林巌を移て美

沈るまゝに我家に佛舍を開き心事を欲
す下畧此古支那にて此三分れわかれ行れ不審
なるは八十年を三つ見るなり冬の
日なれば曲尺なり冠頭なる事今を百
年といふ壽めなりしと世下まて天地の
気弱くなりなりまりて人間の壽命みしく
なりなりて然年来なるまゝ
なりて一し此時代まてそ人生まれてはなく
なるなりと云　愚考白燕なる故を老女と与
一八十年の侍ふ事なり神武帝の玉釵と奪ひ
去るなり前なるいふ倭振を惜く神武帝を童
し途中紙に貫ぬ中なる侍ふ沙一侍ふいふ人
親者ひらきなる形なるなり
なるなりそ心なる
なる七夕れ侍ふ



一書に云荒菜の孝子織女の不孝なる遠侍ふ
ら心織女を天帝の娘河西の牽牛と娶て夫
なり織なるまゝにして父母まうくく天帝大に
いかりなひ中をさけて天れ川を隔て七月七日
一夜の年無なるをゆるしなる則中を断
初なるなる心一書に二百年牛の星と為て元人
なりてそなりなりし仙人生まれるなる
とまを聞を表に林和靖の侍ふ前に生れ
その年に無れ人をさなりてなりて天人形系
一しとなりて七夕の書なを仲人なりと秋事を
侍ふなる窩言侍のなるなる一しと云　芝山曰七夕の
書の荒淫なる侍ふ八を書なるなるなりなるなる一
夜なをゆるしなりなを中隔神なの暗なりなるなる
初なと侍ふなるなりと云　愚考媒神なるなるなる

渭うを生ずるに花を中に引き神ちまを形しなるに中
隔ちの時をうるて咲ちを春
西南に桂の花咲かむ時
一書に云ふ七月の月に一桂の花を月の
ちまて花に喩ふ十五日を盛りて七夕
花咲をいふ也 孟秀
三日花ちを蒼といふ蒼を咲を乱さ
ずしての杜撰なり七日の月を押して月花蒼と
利日に俗ふ沃を七日花月を一日後の月を
十五日を月華なりとは蒼とを俗ちものを
蘭のなりたるト木 うた 春
一書に云新の陶なり菜油菜膏として菜花油を
とるなり陶器に曰菜草生澤畔婦人
和油澤頭故曰菜沃秋の夜の長きを夜を



うけて家業をなる事市中花人の油引るきを
幾の家に曰 賢彩なる女を見て 陶氏
逸考琴操に曰孔子蘭の独秀るを見て歎して
曰夫蘭を王者の香なりとして琴を鼓す此曲猗
蘭操と号す淮南子に曰蘭を男子の佩を花
を花をおそれ香芳しき香おしと女子を佩を
賢彩なる女を幾家に曰 陶氏の
なるを人なりて賢女花俗なる編を一書に
江口の君の俗なりとは非なり西行上人に
口の家に一夜宿をひ給ひ花を見て
ものなる一
花中なりて桂子 春
一書に疱瘡を麻疹のまし正月に仕雪

て祈ふ為る〻〻栗洗ふ孫詰ゆうて
一入おりしろ
鞍を向ふ　舟　麿　社　宮
一書ふ天命り正月の晩拝ひふその國俗を
陸奥の果為く見出して舟筆の宮ふ祈
樂鞍を井て向ふる一〻一説ふ米殺
るを紙ふ色て向るを色向とふ
おそく〻ゆ〻〻
寅社日の旦を　鞍治　社　起て
一書ふ舟筆の宮ふる見入て力立の武仙
を祈足為仕を鞍一むとおるひふ世寅の
日の未ふ文を清めて系詰の為く
一書ふ台命を影りて為の釵を井て
と意報を起すて　私のちゝふ及はされハ



男去の社ふ報詰して寅の一字を転起の
審為ゆ　為考ゆ為の為釵とを行ゆを名
を井人の則為為り干將莫郎天國正宗ふ
この井ゆ為を〻の人の名為り私のちゝふ社
ふひゆ〻〻とを行ゆ為ゆ為ふいふ人ふ台命
をやさゆやゆ又宮の一字を転起の
ゆ井〻法等社襃河為り夫天を子ゆひ〻け
地を世ふひ〻け人を寅ふ為る故ふ子ふ卯寅
ふ起ゆを天地自然為り寅を猛獣ふて法を
司ゆ為ふ寅社日を行ふを力立の為ゆ一〻
宮年宮月宮社日ふ為ゆ為ゆを三寅と号し
て伊豆拝祝ふ綱わしとゆ為さすれて　寅ハ
一日社眼為り
雲　ゆ〻〻　南　京　の北

一書に南京を南都といふ云々
を力士の多く宿するゆへ雲うんそ
きを皇都の地なるゆへ崇敬の初なるゆへ
一書に手將を北京の地と云ふ
ゆへ南京を南京の地と云ふ
ら南京之来呉の地なれとも略　為考
呉の手將を非るうる野制力を以力を良
必定なり

ゐうきして逆らはらぬ人の像

一書に素良れ河を僅たるまして囲離ゆひ呉し
て在を太閤秀吉公の御舎第大和大納言殿
の像なるを今を所の農文を考らるるの為しと
為案并より第別に論す

心の方なるし学押やわて
祈ら逆ぬ為を考らむら函



一書に初陳の名殘をしみ涙を流しと云ふ
寄るるむ次をその人れひとり為のものおひ
りて二台一為なり
武士なるまを禮の上り上に為ると物衣とをねハ武
士なるるるに堂上の侍なるゆへに物衣の不
禮ふしハをしものと武士を禮ら侍なり公卿ハ
物衣を侍しされを此三台れ侍源平盛衰記平
家物語の侍ふいかをとをを侍をなりを為
しなのを初陳をを送るに武士の書と成て
るるし学押世の沢なるむや侍に日村西を
季に むすびてをるを細なり公季に ものひをを
てるを四月に七月に ものに一此侍学に季の別
といをを四月のうるるるをを村函を侍
てを則四月れうるを狩鶴百韻の中に為

しく論す

因家眺望

霜月や鶴の子くるる日和

冬ゝれ新日ゝれ物のあはれ

一書に此服を余情紙毫に作りしものしや等の服を
の日ゝ歌号を芭蕉翁の見出しゝ
いく変を此句を味ひてするのよきこと　一書に
古の服見続の説に
をうなりしみて此句を
をうと只淫く云流しゝ
此句をなく新く古代の歌の上ゝ句に
併ゝれゝ句の心をもてるをうといひけり
をうゝ

一書に鶴の作りしをひ語て



よて句に歌を見をうゝの気情究て新し
をゝをなるをうをわと作りをう意味余情
いく一をうゝ不可説くてよて芭を解する時を
却て第二義に義一きをうゝ略　愚考俳諧を
芭をとをゝをうゝ
をうとをゝ古今ゝ歌説を故に宗祇に歌号と
説を論しをうをうしゝ
又服の句余情紙毫に
芭を解をゝ却て二義に義をうゝ
文盲をゝ此上やなる一きを服を不句の余情を
らをゝをの本侍をう若句
一芭余情のなきをうゝ鶴を水鳥蚕蛾集曰
水鳥者稟陰鶴鶴亦夜鳴又禽経曰鶴伏鳴則
陰仰鳴則晴又酉陽雑俎曰蛙抱聲鶴抱影夜

に吟かうして千々と思ひみだるゝを能々きゝ
勿論なり首うちそらしうしろよりのつとめの
さ日の影ゑとうけしめにけさ日の二字まで今の
余情をいたし候ゆゑかゝる一きゝするまて連ハ
只物まれなりとぞ云流しまうなりつくても
二義に落るやいうに鬱抱影とも是なるべし

樫梢　山家丸　俤を本紫　降

一書に二るに場のなるれも第三にその場をさ定
なるなり　前三前の論としかし　或書一説本紫
かりてといふての字を入て皆一しとあるも非なり
一句丸讀に先心を発一し本紫ふるとよむ　句
なり降るを眼前に見て雪去るなり樫梢の影
に凍て物ふかく影をうけてありしと翌日のちの
そしきるなり本末の降る木て物ろを山家の侍と

見ても死るなり田家の座前なりける本紫の木のふる
をも見まじ山家の侍なりといふ字は侍ことに侍と
いふ字に眼を付けて味ふべし

ひき沈かうしの墻まで去ねまで沈く

一書に是を脱のかた沈くなりと首なるをてみえ
の吟味なるべくといふまじきなりとして置べし篇
てしかるまじきをなしとこまでまでまたいでもやう
なりまなりやそりてまでいひ切也　或書にの脱
まじきにはんとひき沈かやうむ先その引き沈ん
訳んと解すべきなり第一一句丸魂を見その
主の般の類向をとおもてもふ見なり字き本の
蓑降ふとといへば必台中に凍んとなみて物ら八
必定なりその凍りにむかふる牛なきハ引つる
とまで皆かり牛の性として凍にむかふ時八

進まんに敵を引ばらまきてゆくを牛
をまきてなのちらまちらちらと一巻のさそう塩の出
なりをなりの要言故事曰埒雅曰牛走順風
馬走逆風

なるを敗きを具足を月のうすしと
一書に陳氏れて塩とをえて着るをきといて具足を只
飾を並ぶとみえたる甲冑の軍場の使をえ作る
無者大りをよろしをまとをまれ詮といふものの
をえぬるを引ばるを月を魂をして陳中を
一をれ掃掠をを為ていふいや月を定をまを
をといをむを月といふを非入用てをけまハ
吳客の月ををて出す〔をまを〕月の字三ををて
あをり出ばきふをあをやや十四文字やや十七
文字をて涼砂の意味をのををををよをを勝を



ををねを解をぬをり 世説新語補曰奮云臣猶
吳牛見月而喘又風俗通曰牛出吳地北南
の界をして暑甚しをの熱ををむゆを月
をををて又喘くをりとをく故を月ををて更
に逆をねを引ばるををとをを陳ををれをり此月
をて引ばるを牛をれををぬ陳をりと知
酌 とり 盞 菜 切 いて
幽菜集に菜切をりと書て出しをを云語
月ををり予れををらくをるの義ををてををハ
必見渡しを忘れをのををるハ在てをり
をを菜切を出と一をれ琴懸隔を
一書に血をの酒盞と競向を定め大将を陣
守の盞仏の花を生む
余情をり此注をを盞の論をれを彩

なのそしてその罪を乱すれば
林れば旅の仏連歌いとこうわよ
湖をまして富士　見ゆ歌寺
一書に第百れ葉を席上の活花るり宴まを
仏上活仏下向後沢拝れ彩り活見寺の間の仏連
歌るむ　一書に仏まを旅とりのより活見寺の旅
をりうと場を究て三国宗双の不をと脇る旅
の一宗より力ものり　為考活見寺とを名なるやを
いうるまハ先注をそのやうりるを云れむるるむ富士
見ゆる寺るまをとてとてるよいとれりみてこの後
河の内れ寺るハ活るまるるをきるを名の寺
まをるまるるるるうこいてを決して流めるを
をうてきをみるまハ後のるまて宝るを相列
まをるる富士ゆつより湖をまをとかを入富士



見ゆる寺とを禁るるる一名の雪のうときを
上より東海道をを見ゆるるるるる次の
るるるより論るり

雪として梢の花の　薫る春
菜より東拝　をそむる雪の香

一書に菜いるより東を薫るとをいるをとゆを
ハ云けるる梢より掛竿れ余情まあるむる
一書に東拝の立れるる蘭天のさるを得てを
るる新菜の負ひをるるせるる一　第考
いるまを非る菜の木より東拝のるるふ活をるて
菜の負ひを春の吹き立すといるるり

紙追より　烏帽子の女五三十

一書より宴りまを義仲の聖拝より巴山吹を不
の女中れをを烏帽子物衣るむとを義

ばまして拾無の俤なるむ

庭 よ 木芍 ゆるさつひの落衣

一書よ近代まで法度方のはるくさみよ玉海を
或ま木芍藥の京色を庭前ふうはるらん
藤向まるるまるるまるるの形るむ雑造といのより全く
木芍藥うこと 一書よ木芍山の絵京をつく
らもてるる花子ろ宿の杏るるるる一一京の落衣と
ま玉ろ書の粧なるむ

玄 海き山 橘 よ さらるむ

成美曰古今集栄雅仁の注山橘を世俗やふ
ろ〜といて実赤し髪そきの時山芍よ流
芍芍るる大和本草訓乎地木為耶麻多
知波赤甚形状亦全今云藪柑子るる
愚考八雲御抄云山タ千八十ま牡丹るる又橙之



と云て さまさま牡丹の対強りいるむ花奈の俤
を好むの附るまま橘と牡丹を一度不見む
色て ま て木芍花ろの花るるる対すて次の
麻刈といの集ま寓云るる獨樂唐ま物年
野るる江を迫くとなるまま近江るまえのや
唐のとそのくるなるむいいまるく好く我月出よま
ま玉の如実相の月るる対るを花不ろといのより
薬花を附て宿よ甲斐るき人のさるる

藤衣 留よ薬花を手拂ひ
絵裏 ゆるす 木瓜の 山なる

異考薬花を不吉のるまま八流人の俤を
附るるまて木瓜の山なるといよ見知なり
本草曰利筋骨去湿熱消水脹治産乱轉筋脚
気腎痢腰足無力又轉物志曰木瓜味酸善療轉

節の轉節時但呼木瓜名亦上書木瓜之字輙
愈留より義花を義梅の曲るり公卿の因人より
てれハすりるり毛海の出労をいさくり系らもむ
とれるひ法けて行れとより書ひるる形山る
りて人をまを氏瓜の花の盛より咲て物
ふを見鉦裏より出し系らもるる明を
るるるて指より秘義の留を一曲ハとれ形うら
ちるる花を留とり出し手撰ひより貸る面
し木瓜といひ山間といひうし鑒固の武士の心
者を物るれるる系るる不吉の義花物
是ハ次より骨を見てとを附るるる
乞食の義をるるるるのくめ
一書より骨をえてといふより戦場の貸とえて
その由緒の人のとくるを葬らむと心者そこら



より語合をるる乞食の蓑をを交て骨を包み
て物るむとする人の貸るり
況れ上より尾を引袋を拾ひ捨て
愚考骨を包むとしより蓑をを手一れのひ分け
るる指ひ物る袋を包むと奪るるるるる
此ものるむ例のき注釈物まとる吟より及を氏
佛幸より進む　水れ　みるり
一書より美濃國養老の滝るむとの清水と
見出し活袋を献より余情なるる　一書ふ
魚を物るとしより一物して川物の清水と
物るり況のひきより典業改水毒を解すれ
るりを物るるる物る一　歳美日
続日本紀曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不破行宮留連数日因覧當耆都

多度山美泉自盥手面皮膚如滑亦洗痛所
無不除愈云々　勇秀小角豆炭園芽子萩蓮の
実月の若狐好持　此七ツ枝を折しをるを
なを旅の伴りて紀しを書るつぬしさまはさて
川狩堅魚の出音とそえぬるついるまりゆ
物ゐ出音ゐるむる天子ゐ行幸と書つきるつ

霧　おく　狐火やゐ　れ　しき

勇秀時雨を堅を慈野手を雨を悲むる欽明
帝十六年北于をキツるとをいし姫しこ五雑姐
曰巣居知風窠居知雨狐を穴よ居るものゐ
を雨をゐ形しよ　答ゐを風をゐるしふゐ夜ゐ
源更よ及ひ秋天澄ゐて珍賜として嘉の
一面よ盃わ〳〵ゐるむゐを浅ゐとつきゐ



れゐ所を出ゐ出むく白浅ゆのゐうしと歌ゐ
ふを狐を雨ものと光を雨ゐうゐて己ゐ窠ゐ水
のゆ〳〵ゐ出むるをゐ形しふとを濃よ居ゐ〳〵ゐ
一ゐるゐうをて古の七ゐ月ゐ杉のしをゐし
注ゐを行の出ゐゐ形ゐ光ゐ出ゐれ紀りよ擬して
紀ゐ物の帝ゐゐよ浅よ葉をくりふゐを却て擬
よ公人ゐむものの

皇　賀　浅ゐうて　毎れ喪よ入
元　改の茅れ被ゐ　彼ゐ　一一

一書よ斤底を喪家ゐ見弩ゐゐ古代ゐ殯と
ゐ移てゐゐひゐ〳〵よ造ゐゐのと大和国ゐをゐて
ゐ上代の遺俗ゐをいゐゐ奥ゐゐ亡ゐの殯と
を伝ゐて喪中籠ゐ出ゐゐて毎の喪と云
ゐ元改と見定て殯と役法師八慈毎ゐ

孝心なる人にして蹇の母を負ひ身延山に詣し
紀行の詩歌世に行はる当流の才物法華一派
の師なり行状は続隠逸伝にも委し　成美
日文政元寅根岸侯の家士俗称石井平之丞二十六
歳にして薙髪為僧深草瑞光寺を草創す四十
六歳にして寂

伏見木幡の　鐘　花をうつ

愚考深草の花を伏見木幡の入相のかねに
花やちるらむと作りし深草に墨染桜とて名木
なり古今哀傷の部深草の野辺の桜し心あ
らばことしばかりは墨染に咲け是ハ[illegible]
の山に葬をおさめける時岑雄のよめる歌なり此
歌によりてすみぞめ桜となづけしとなり
木幡をコワタとよむ一説万葉に強田と書る



至極なり

いらつきし男猫ひらりと捨てゝ
妻のもとすれ雪たまきかな

一書に入相のひのひはる男猫のつらさを女
夏の人の法ねきるよふるり而れ自ちて猫を
雪気をおそるてまの外へ雪掃をよるようり
宿りのかれて女三の宮の御子の猫のかの
男猫と押出して自作りて妻の猫の本情と　愚考
妻まて男猫か女猫をそ恋ひ枕なる女猫の男猫をとなる

水干を着る句れ聖若やかに
山葉花よわよ笠の木かうし

愚考此二句則冬れ日一部を巻納めたる句
ひかりて首尾連環の格なり巻所の狂句の
二字に対しうる秀句にて二字なりしさまは狂句

の二字の大切の字眼をうゝ結ぶ曰揚句に
はじめて物を起さんの揚句をしめて巻
を出するの二句一言の下にうゝ
し服の山菜花を合して春句を狂句
の連環なり中に格句を出てたゝ
めて自立を保ちて此句近年此俳書に
揚句にはじめて意句を出し或をしめて
句の巻を出すの巻を作の族なり一一形式
一巻にするをよく文に中の巻の揚句を古今に
例なき一格なり格句弁に出を淺をしを
いうなり正格なるや学ぶべし大切の要示なるを

追加

いうに見よと雑面をうゝしをうゝ霰



一書に牛の沈きりの霰の烈しきを敬
白とせり 電者砲也中物如砲也 略 亮考
夫木集に菊小田の略の上をよりの又行助此古歌元を
いてしの玉をもてるを内の霰なれ歌
ていひ連歌といひ只一句のみ
形式して殺伐に成しそまを我祖翁の
教ゆてこの句に仁情の境に入るひけまハ
蕉風の世とを一統をうゝ古人の内をうゝ
のを学ぶてひをうゝ学をうゝのハ力
はをくして無りとまを学ぶをるに年なをを
むをいう形をむと牛の沈をきりのに年をく
はをれをとをるを沈をきの年沈をり

橘大に あるの 桔 示れ 松

一書に牛追の童子有りて摠
仙人を追ひ一附歩す小牛十余と雖も一連
に追ひ行く牛の背きて臥まろぶを
泊の度とす牛を養ふ臥し牛追
仮社稷家に芝をしして蓄ふ小祐孫
と接ひあつめて焼く酒を豊の原すゝめて
めをして休む而して樹の枝ゝ炙りて呑し
丑の刻ゝに及て附をきらきらに歩りと壮年
の時の法をうゝ教るとて見給ふと云て
一説に曰樹を火桶の古くをらひ旅りの時
拾ふ物を火を樹火といふと云 万葉巻
酒をあつめて夜を夜をあつらとする
ゝ俗此の元火をさして樹火といひ
て樹火焼物に樹火よりれると此樹出し



人足の岩の初ゝ根を木よりて体しを
のゝ物さまハこの樹火にして松の根を焦すとゝ
爽に焼焦てゝ而て大体此体木樹てい
法を書古ゝ物

木紙荷 木紙を菓子として
一書に曰体の名にして木紙荷を見出し
ゝ物ゝ菓子菓を油を煮て結ひて一本束
ねゝ物ゝ菓を焼てゝ油を煮て結ひて一本束
ゝむ 一書に樹火といふを庭燎或ハ火
焼ゝの神ゝと云て神いさめの能と謂さ
ゝ物ゝ 兎毛木紙荷を枝葉にして
を神ゝ物ゝ木紙荷ゝ自ら表ゝ物ゝ神ゝ
の法をいふ云ゝ物ゝ先注のめく木紙
ゝ物ゝ出ゝ物

拾笠ふ宮をやたす　鈴霧

一書ふ山路の体まて用明天皇いまし〻皇子ふてすし〻る時彼玉代姫を意ふひて菊ふやたしるふ侍るり　一書ふ宮方れに旅りすして供奉の人〻れるすゑ給ふ知をてう〻たく侍る一〻

紀ふ　拾　の　ふむ　月　を　海
ひふりふ　拾　をすする岐阜　山

一書ふ大塔宮ふ侍るふの源泊と見ふて紀ふ拾貫ふむと形ふむ次ふ焼拾の素名と宮て左ふ拾をすう〻右ふ改阜山を見る眼前ふ　一書ふ表ふりれ侍ふ名取泥名を出する芝筆蕉つの身奉る一〻



附て云冬の日ふ許六曰次韻の風調ありてれかふるめふれ解すつきりのふかふと書置一ふりふを稽しの注釈出来りて却て俳諧を害ふふ至る形ふかふ故ふ難陳ふふ抜きふ及一ふ竪ふの れのふふ孫ふ砌りふ来ふと古集の解しちふひふ分れたいふ品の上ふ及ふれ侍ふるふ見れふふるまふふを意をいふふして言結めむとする筆弾こうふりふふきひしきふふるふる一〻ふまふふこの形ふう私の宿意ふあふふまふ意ふ書ふふ見ゆふ一〻

落注
五形　堂　れ　ふふ　け　六五

曲・秀歌自分縣ふる花見次席を百姓の丈家と見て　秋肥寺れ侍ふり見原氏未曾源の記曰美濃国

加納より西を平田まで鄙家形ゆゑ馬小
食へ一きく草形ゝ田畑よりまむけ花とりつゝを
植て稀とす又ゝ苅取て田肥しまゝす紫
草て為宝義花とりて云て五形堇と作り
ゝ為ゝ俳諧の虚ゝ先注のまゝく実ハ五形
堇とゝて荒畠とゝ為ゝ云語田形の癖案
国法をとゝ為ゝ罪人ゝ為ゝ